

フィールドワークで期待できる成果

以上の調査を通して、まずはじめに期待できるのが、パリを中心とした19世紀の壁画／装飾画についての包括的な資料が作成できることである。これまで、教会や役所などの分野別の資料は散見できるものの、「壁画」というタームでまとめたものは未だつられていない。作品の質（つまり、傑作であるかどうか）の問題はおくとして、19世紀に描かれた壁画をまとめた資料ができれば、これまでの美術史ではこぼれ落ちていた多くの作品を取り上げることができ、そうすることでようやく、私の中心的な研究対象であるピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品の本格的な検討に入れることができる。特に私に関心を持っているピュヴ

ィのイメージの着想源の問題は、この資料作成の作業を経なければ画竜点睛を欠いたものになってしまうであろう。

文献の調査では、フィールドワークの限られた時間のなかでどれだけ多くを複写できるか、が目的であるため、その個々の検討は帰国してからになる。しかし、上述したようにこれらの資料は日本国内ではほとんど手に入らないものであるため、今後の研究の基盤となり、それを飛躍させるようなものになるであろう。

このように、今回のフランスでのフィールドワークは、私の大学院の研究において基盤となるものである。十分な成果があがることを、個人的にも期待している。

日本在住外国人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究

森田 剛光

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程1年

研究計画の概要

和崎春日教授は、日本人と在住外国人との異文化コミュニケーションを促進させ、また多文化社会のもとでの共生に向け、その方向性を探るべくフィールドワーク、研究プロジェクトを組織してきた。従来在住アフリカ人が中心であったが、ネパールを加え、比較文化研究としても問題提起が可能であると考えられる。上記の研究計画の概要に沿い、まず、在住ネパール人の社会、コミュニティなどの基礎的調査を行ってきた。

以下簡単であるがネパールの人々の状況についてまとめる。

ネパール社会の構造

ネパールは、多くのエスニック・グループ、カースト、言語、宗教的コミュニティから構成される文化的に多様な国家である。ネパールには60のカースト・エスニック集団と70の言語と方言が存在するといわれ、その様態はトニー・ハーゲンの「アジアの民族博覧会場」[Hagen 1980: 91]という言葉で語られるほどである。ネパールの文化的多様性は、度重なる人口

移動の結果であり、人々の居住地は、高地、中間山地、平野部と大別できる。チベット・ビルマ語を話すエスニック集団、たとえば、グルン、タマン、リンブといった人々は北と東からヒマラヤを越えて移住したといわれ、ネパール語を話すパルパテ、つまりバフン、チェトリ、タクリは西と南から移住した。エスニック集団のネワールは、2000年にわたってカトマンドゥ盆地に移住してきたいくつかのコミュニティにより混成されている。タライ平原には、先住の人々、タルー、サタール、サンタルの森林居住民と、後にタライにやってきた農耕のマイティリ語を話す人々などが暮らしている。言語集団分布は、山岳部を中心に居住していたチベット・ビルマ語族とインド・タライ平原部から進出してきたインド・ヨーロッパ語族が丘陵地帯で拮抗しているが、実際にははっきりと区分できるわけではなく混じり合い複雑な民族構成と分布をしている。人種的には、チベット・ビルマ語族は、モンゴロイド系、インド・ヨーロッパ語族は、アーリア系コーカソイドである。丘陵部に住むネパール語を母語とする人々は、「パルパティ（山地の）ヒンズー」(Parbath hindu) と呼ばれ、ヒンズー教に基づくカースト集団を構成している。このカースト集団の中に、

バフン（インドの「ブラーマン」のネパール語）、チェトリ（同「クシャトリア」）の高位カーストと、ダマイ、カミ、サルキーなどの不可触とみなされる低位の職業カーストが含まれ、中間に位置するカースト群がないのが特徴であるとされる。タライ平野部に住む北インド系諸言語を話す人々は、バルバティ・ヒンズーとは異なったより厳格なカースト・ヒエラルキーを持つ社会構成である。高位カーストのブラーマンやラージプートから低位の不可触カーストまで、中間層を含めてさまざまな職業カーストからなり、その数は60近くになるとされる。カトマンドゥ盆地に住むネワールの人々は、言語上はチベット・ビルマ語族であり、仏教徒とヒンズー教徒の両方が存在し、それぞれに独自のカースト制度を持つ。高地に住むチベット・ビルマ語系の人々は、原始宗教とチベット仏教徒である。宗教的には、ヒンドゥー教、仏教、イスラムそして地方信仰などがあるが、ヒンドゥー教と仏教の境界は曖昧である。

ネパールは、多数のカースト、エスニック・グループで構成されている。個々にエスニック・グループの全体に占める割合を見るならば、最大集団のチェトリでさえ16パーセントを占めるにすぎず、1つのエスニック・グループが多数派を占めているわけではない。しかし、ヒンドゥー系に括られる人々の総計は、全体の86.5パーセントに達し、ヒンドゥー的価値体系がネパールを中心であるといえる。その1つがジャート（Jat）である。ジャートはネパール語で「民族」に相当する言葉であるが、同時にカーストも意味する。ジャートという語彙の使用に当たって、民族とカーストとの区別は原則的にない。ジャートがより具体的になったのは、ラナ家専制時代1854年に定められた法律ムルキ・アイン（Muluki Ain）によってである。ムルキ・アインはジャートによって人々を区別し、多民族で構成されたネパールを支配する装置としてつくり、100年もの間基本的に存続し、現在も影響している。ムルキ・アインで特徴的なのはネパール全土の各「民族」が1つの大きなカースト・ヒエラルキーの中にとりこまれていることである。集団内部にカースト的ヒエラルキーを持っていないと、ネパール社会という大きな枠組みの中では、否応なしにカースト・システムの中に位置づけられてしまうこととなる。1990年のネパール王国憲法第4条に「ネパールは多民族的、他言語的、民主的、独立的、不可分の、主権的、ヒンドゥー的、および立憲君主制的国家である」と記されている。ネパールは多民族国家であり、民族

の平等は憲法により保障されているが、大半を占めるヒンドゥー系住民との関係によってカーストと民族という社会的枠組みは長年ネパール社会内で機能し、ヒンドゥー的価値体系は、各民族の関心に影響を持つ。そのためネパールの人々を考察する場合、ジャートと他民族との関係性はとて重要な事柄となる。

ヒンドゥー社会のまなざし

ヒマラヤ山岳地域の北方高原に住むチベット系、モンゴロイド系の人々を、一般にボテ（Bhote）と呼ぶ¹⁾。ボテは単一の民族集団を構成しているわけではなく、前述のムルキ・アインによって多くのヒマラヤ山岳地帯に住むモンゴロイド系の人々が各集団の民族意識や文化的な特徴はあまり考慮されないまま括られている。さらにヒンドゥー高カーストの平地に住む人々は、山岳に住む人々に対して、文化的、宗教的な価値観が大きく異なっていることから、彼らを自分たちのカーストよりも低位に位置づける²⁾。そのためヒマラヤの山岳民族は高カーストからの侮蔑を含むボテと呼ばれることにおおむね嫌悪感をもっている。「『ボテ』という名前の拒否は、ヒンドゥーの文化的影響を強く受けた人々の間だけでなく、チベット仏教を信仰し、チベット系の言語を話す人々の間にも見られ、自分たちを劣位に位置づけようとするヒンドゥー高カースト視線に対する反発という側面がある」[名和1997:53]。ボテと呼ばれることは、近年チベット系、モンゴロイド系の人々が都市部に多数移住してきた結果、ヒンドゥー系の住民との接触の機会の増加とともに顕在化している社会問題なのである。

以上のことから、ネパール社会の構造的問題により、ネパール内外で異なったジャートが連携、連帯をとるのはとても難しい。よって多くのネパール人が異なるジャート間の連携よりもネパール人以外の人々、つまりはカーストのまなざしの外にいる人々、外国人との連携の方がとりやすいという。現在調査継続中であるが、インフォーマルな部分、仕事場が同じなどの接点によって知人、友人関係を取り結ぶ例は見られるが、それ以上に拡大しているというわけではない。また、在住ネパール人はオーバーステイしている者も見受けられる。このことも各人の関係性の結び方に大きく影響している。

今後の予定

平成18年度科学研究費補助金 基盤研究A「来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する人類

学的研究」研究代表和崎春日名古屋大学文学研究科教授、課題番号16202024)の支援を受けて、「来住アフリカ人とネパール人の共同に関するアジア地域(ネパール)における商業・文化活動の調査、文献資料収集を2007年3月18日から3月31日にかけてネパール、カトマンズ市域において行う予定である。

その他の補助業務の内容

研究活動を円滑に進めるべく、私の技術経験を生かしたPC等研究環境の充実を提案支援している。

注

- 1) 1960年代以降大量に流入してきたチベット本土からのチベット人難民はボテとは呼ばれず、一応の区別がなされている。
- 2) 居住地域に対しパハディ(Pahadi)とマデシ(Madeshi)という分け方がある。パハディとは、丘陵地帯出身者で、マデシはタライ平野出身者をさす。パハディは、カースト制度を持つパルパテといくつかのエスニック・グループから構成され、全人口の6割以上を占める。

引用文献

Hagen, Toni. 1980 "The Kingdom in the Himalayas" 町田靖治訳『ネパール』白水社 1990

名和克郎 1997「カーストと民族の間」石井溥編『暮らしがわかるアジア読本ネパール』河出書房新社 pp. 46-54

カメルーン・グラスランド地域における文化人類学的研究 ——仮面文化に関するフィールドワーク・仮面使用と文化様式における関連性に着目して

後藤 澄子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程3年

研究の目的

本研究は、現地調査に基づいてカメルーン高地、王制社会の仮面文化に関する詳細な民族誌的記述を行い、アフリカにおける王制と仮面文化の関連を明らかにするとともに、仮面と権力の関係に関する人類普遍の理論モデルの構築を目指すものである。

アフリカの仮面に関する民族誌的研究は、国内外でそれなりの蓄積があるものの、多くは王制研究とは全く別の文脈で展開されてきた。しかし、仮面活動と王の活動は、ともに「社会における権力」という観点からみれば同列に扱える主題であり、本研究は、アフリカの王制社会および首長制社会に対する理解に通じるものと考えられる。

本研究では、以上の問題意識のもとに、まず王と仮面結社が並存するカメルーン高地において現地調査を行い、特に仮面結社の観点から、仮面活動と王制の関係を明らかにする。特に、「仮面活動を通じた周辺地域との交流活動」という側面にスポットを当てながら、当該社会と周辺社会との交流を描く。その上で仮面活動を物質文化的な側面と、仮面への概念を中心とした象徴的な側面を論じつつこれを社会動態的に捉えることを目指す。これまでの調査研究で明らかになったWimumbの社会組織と仮面に関する諸研究を基に、仮面様式の比較を行い、物質的側面から周辺地域との

交流を明らかにする。また同時に、仮面結社の入手経緯に関する伝承を収集することによって、19世紀末～20世紀初頭にかけての王国成立史を解明するための一資料を作成することを目的とする。

調査内容与方法

調査方法

調査対象地域として、カメルーン北西部州バメンダ高原地域社会、特にンカンベ首長社会を設定し、以下の項目を調査した。なお、調査地においては一般家庭に下宿し、日常生活を共にしながらインタビューと参与観察を並行する形で行った。

1. 首長制社会において仮面の果たす社会的機能に関する側面
 - 仮面を所有する組織や結社に関する詳細
 - 仮面結社と結社が所有する仮面に関する結社成員・非成員の両方が与える概念調査
 - 歴史的背景——首長制社会の成立経緯と変遷
 - 仮面が登場する祝祭、特に王族の葬祭や即位式等の場における仮面活動
2. 仮面とジェンダーに関する側面
 - 仮面に関する女性禁忌(タブー)に関する概念の変化
 - 王制に属する女性の組織集団を調査
3. 仮面活動の現代的展開に関する側面